

特

集

果樹カメムシいま・むかし

## 果樹カメムシの天敵群と、それらの利用に向けた展望

明治大学 農学部  
法政大学 生命科学部つな  
綱しま  
島あや  
彩か  
香

明治大学 農学部

いと  
糸やま  
山きょう  
享

## はじめに

果樹の果実を吸汁加害し、落果や奇形果を引き起こすカメムシ類を果樹カメムシと総称する。日本国内では45種が知られているが（日本応用動物昆虫学会，2006），その主要種は，チャバネアオカメムシ *Plautia stali*，クサギカメムシ *Halyomorpha halys*，ツヤアオカメムシ *Glaucias subpunctatus* の3種である（ADACHI et al., 2007；KIRITANI, 2007；貴志ら，2017）。チャバネアオカメムシは分布域が最も広く，1970年代から被害が急拡大し，今では全国各地の様々な果樹栽培で問題となっている。クサギカメムシは冷涼な地域への環境適応性が高く，東北地方でリンゴの重要害虫となるなど，特に中山間部や冷涼な地域で問題となる（外山，2014）。ツヤアオカメムシは，カンキツ栽培ではチャバネアオカメムシに次ぐ優占種であるが（井上，1986），近年の温暖化の影響で分布域が北へ広がっており（KIRITANI, 2007），福島県の沿岸部では2001年に初めて発生が確認され（柳沼ら，2002），同地域には既に定着していると考えられる。さらに2020年には岩手県の内陸部でも捕獲され（降幡・岸本，2023），今後の被害拡大が懸念される。これら3種は日本国内での分布や被害作物，さらには越冬場所に違いがあるものの，いずれも成虫で越冬し，越冬後の成虫が繁殖可能な寄主植物へと移動し，そこで1～数世代を繰り返し，短日条件になると生殖休眠に入り，越冬場所へと移動する（外山，2014）。こうした似通った生活環の中では，個体群密度の抑制に関与する天敵生物も似通ってくるのか，卵期間には卵寄生蜂が，成虫期および幼虫期にはシヘンチュウとヤドリバエの捕食寄生が，それぞれ確認される。本稿では，果樹カメムシ主要

3種に捕食寄生する天敵群について紹介したい。本文に先立ち，九州大学比較社会文化研究院の館卓司博士，松尾和典博士に御礼申し上げる。

## I 卵寄生蜂

カメムシ類が最も天敵の影響を受ける発育ステージは卵期間であり（GREENE et al., 2018），卵寄生蜂は効果的な生物的防除資材となり得る（CORNELIUS et al., 2016）。特に，*Trissolcus* 属（ハチ目タマゴクロバチ科）の卵寄生蜂（図-1，2）は有力な天敵であり（TALAMAS et al., 2015；



図-1 *Trissolcus japonicus*（ニホンクロタマゴバチ）成虫



図-2 ツヤアオカメムシの卵塊から脱出したニホンクロタマゴバチ成虫

Natural Enemies of the Fruit-piercing Stink Bugs and Prospect for Their Application. By Ayaka TSUNASHIMA and Kyo ITOYAMA

（キーワード：果樹カメムシ，土着天敵，卵寄生蜂，シヘンチュウ，ヤドリバエ）